

和歌山大学教育学部と和歌山県教委が モデル事業スタート!

— 永井学部長 —

和歌山大学教育学部と和歌山県教育委員会は今年度より、和歌山市教育委員会、岩出市教育委員会、紀の川市教育委員会と連携して、新規初任者教員18名を対象に、初任段階の高度化研修を行う事業を全国で初めてスタートさせ、4月4日(木)に、第一回目の研修会を和歌山大学教育学部で開催しました。

これは、教員養成課程を、大学の4年間に加え2年間の大学院修士課程の履修を求める中央教育審議会の答申案が、去年(2012年)8月に出されたことを受け、和歌山大学教育学部と和歌山県教委並びに関係市教委

が協議し、初任者研修を高度化することによって、「学び続ける教師像」を具現化する初任者研修のモデル事業を全国に先駆けて行うものです。

開会の永井邦彦教育学部長の挨拶では、小中学校や特別支援学校に勤務する18人を対象に、和歌山大学教育学部の教員らが、18人が配属されている学校を訪れ、授業を参観して指導するほか、大学での月一回のカンファレンスによる研究・研修も実施し、1年かけて教師としてのより高度な知識や技術を習得するというねらいを説明するとともに、「この研修では教えられるのではなく、生涯学び続ける力を身につけるように心がけて欲しい」と希望を膨らませている18名にエールを送りました。



自ら学ぶ姿勢を強調

— 県教育委員会 岸田学校教育局長が講義 —



続いて岸田正幸学校教育局長が「教員免許はライセンスかサーティフィケーションか」という問いかけから始まる講義を行い、学校課題の複雑化・多様化、教師や学校への信頼の揺らぎの背景、その改善のための国の動きを説明。また、医師の技術が日常の絶えざる研修によって成り立っていることに触れ、「良い教師は常に学び続けている」ことを指摘しました。

さらに、「教育委員会と大学との連携による初任段階での研修の高度化」というこのモデル事業のねらいが、「学び続ける教師像」を強調した中央教育審議会答申に基づくものであることを分かりやすく説明しました。

最後に岸田局長は「生涯学び続ける教師になるための基礎的な力を身につけてもらいたい。人から教えられるのではなく自ら勉強する力を獲得してほしい」と強調しました。

— ICT活用を図るタブレット端末で研修 —

午後からは、和歌山大学教育学部の豊田充崇准教授が、この高度化モデル参加者全員が使用する携帯用情報端末を使って、初任者や担当教員にSNSを使った教員向け情報交換サイトへの書き込み方法などを教える講義と演習を行いました。

今後各自がこの端末を用いて情報交換や教育実践、成果物の記録を行い、カンファレンスに持ち寄って発表するというICT教育の高度化も行います。



グループワークで目標や悩みを共有



午後の最後の研修ではKJ法を用いたワークを行いました。

各校種ごとに4つのグループに分かれ、「どんな教師になりたいか」「1年間こんなことを研修・研究したい、学びたい」「不安や心配事」など、初任者各自ができるだけ多くの情報を出し合いました。そして、テーマごとに分類してまとめて発表し、全員で思いを共有しました。

◆参加した初任者の感想から

- 川本先生のお話にあった『目指す教師像』は、理想的であると感じました。「高度な知識とスキルを持った教員」、「教育実践を分析検討する力を持った教員」、「将来の中心的なミドルリーダーとなる教員」など、高度化モデル事業でこれらのことをしっかりと身につけ、『目指す教師像』に近づけるようにしたいと思いました。
- 背筋が伸びる思いで講義を受けました。今回のカンファレンスはオリエンテーションが中心でしたが、これから私たち18人が軸となり、能動的に進めていかなければと強く感じました。学び続けることの基礎をとことん身につけていきたいと思えます。

第2回合同カンファレンス

「授業づくり」で実践交流

5月16日(木)、今春リニューアルオープンした和歌山大学付属図書館マルチルームにおいて、第2回合同カンファレンスを実施しました。

初任研高度化モデルの教員は、4月からの「授業づくり」の中から特徴的な実践をそれぞれプレゼンシートにまとめ、資料やタブレット端末で撮影した児童生徒の様子などを見せながら各校種ごとに発表し合いました。その後、発表内容についてグループ討議を行い、お互いの実践を交流し、自分の実践を省察しました。また、他者の実践から学び、今後の抱負を語り合いました。

自分の実践を発表した小学校の1分間スピーチでは、「私のクラス目標は、『認め合い』と『言葉は心』です。お互いを認め合えるようになるために、まずは自分の考えを言葉で書いて表現できるように心がけています。また、他の児童が発表した考えを認めていけるように、『振り返りカード』を用いて、友達の良かったところを認めていけるようにしています。」など、子どもに視点をあてた学級集団づくりの実践発表が相次ぎました。

グループ討議では、小学校グループからは「活動の中で気づいたよさを授業の中で生かしていきたい。」教師がしゃべりすぎない授業づくりを目指したい。」などの抱負が出されました。中学校グループからは、「楽しいと思える授業にするため、ICTを活用した視覚的教材を作っていきたい。」などの抱負が出されました。特別支援学校グループからは、「見通しを持った流れのある授業づくりを目指して取り組むことが大切であり、TTでの支援方法の共通化について学んでいきたい。」「授業の振り返りの中で、次に改善すべき課題に気づいていきたい。」などより実践的な内容が報告されました。



パネルディスカッション「授業づくりについて」

— 優れた実践から学ぶ —

午後は、まず、紀伊コスモス特別支援学校元校長宮本孝子先生、西脇中学校長北垣有信先生、藤戸台小学校教頭横町真紀先生を迎え、パネルディスカッション「授業づくりについて」というスキルアップ講座を行いました。それぞれの校種で優れた実践経験を持つ3名のパネラーより「授業を行う上で心が



けてきた点、大切にしてきたこと」を中心に、豊富な実践が報告されました。

横町先生は、「授業を楽しめる教師になって欲しい。そして子どもの変容に気づく教師になって欲しい。」と述べ、子ども全員に発表させる工夫、緊張感を持たせるコツなどを披露し、受け身でない授業の大切さを強調されました。北垣先生は、教材開発することの大事さをポイントとしてあげ、写真から川柳を考えさせたり、四コマ漫画を使って表現法を磨いたりする授業の実践を披露し、「教師には、授業力・学級経営力・プラス α で特化した力が必要だ。」とエールを送っていただきました。

宮本先生は、「どの校種にも言えることだが、特に特別支援学校では、子どもの危機管理を徹底しなければならない。ヒヤリハットを共有することで大きな事故の予防に努めることが大事。」と述べ、子どもの行動の背景や原因を考えること、実践に裏打ちされた理論を持つことが大切であるというポイントを述べられました。

初任教員からは、「パネラーの先生方の授業を実際に受けてみたいと思うほど、エッセンスが凝縮されたお話を伺うことができ、直ぐに実践に活かしていきたい。」などの感想が大学に寄せられました。

好評なカフェタイム ～Consultation&Exchange～

合同カンファレンスでは、最後にカフェタイムを設定しています。これは、初任教員が大学のコーディネーター・大学教員に自由に相談したり、アドバイスを受けたりすることができる時間です。また、校種の違う初任者同士が交流を図り、自分自身の課題に気づいたり、新たな学びにつながることを目的にしています。「お互いの出来事を報告したり、疑問に思っていることを相談したりするなど、有意義な時間を過ごすことができた。疑問や悩みを専門性のある先生方に相談できる絶好の機会だった。」などの感想が大学に寄せられました。



◆参加した初任者の感想から

- グループカンファレンス、パネルディスカッション、カフェタイムと、とことん「授業づくり」について考えることができた。大切にしたい事や子どもへの関わり方は校種が異なっても共通することが多く、実践に活かしてみたいというヒントがたくさんあった。カフェタイムではもっと多くの人と話したいと思った。
- 受講可能な大学院の講義のガイダンスを聞き、「自分の経験が子どもの人生を豊かにする」という宮本先生のお話にもあったように、時間が許す限り積極的に大学院の講義を受講して、まずは自分自身が学ぶことにどん欲でありたいです。

第3回合同カンファレンス

「特別支援教育」から学ぶ

6月20日(木)、県立紀伊コスモス支援学校において、第3回合同カンファレンスを実施しました。まず最初に、子どもたちがスクールバスで生き生きと登校する様子を参観しました。先生方が「おはよう！今日も元気で頑張ろう！」と子どもたちを温かく迎えていました。1日の始まりがスクールバスからということ垣間見ることができました。

その後、田中校長先生から学校の紹介が行われました。①何事にも全力で取り組む子どもたちが素敵②授業を進めている先生方が素敵③職員の工夫が凝らされた施設が素敵という「紀伊コスモス支援学校の3つの素敵」を説明していただきました。また、「職員に求められる情熱と専門性、授業づくりの大切さ」について講義していただき、「全ての学校に共通する課題」と、強調されました。

続いて、同校の協力校指導教員で、中学部主事である白井博子先生から、紀伊コスモス支援学校で使っている「コスモス授業チェックリスト」について、内容とねらいを説明していただきました。同校では授業研究が活発に行われており、その効果をさらに高めるために作られたものがこのチェックリスト。子どもたちに学ばせたい内容をただ教えるだけの授業や、一見子どもが活動しているように見えても、実は「できる課題」しか設定されていない授業にならないために作ったものである。そして、わかる授業は、自己肯定感を育み、子どもの成長につながる。授業の中に学びを作りだし、らせん状に実践を高め確かなものにしていくためにこのチェックリストがあることを、白井先生は熱く語ってくれました。



授業参観と研究協議

— できたときは全身で褒める —

午前の最後は、2つのグループに分かれ、紀伊コスモス特別支援学校の初任者2人が主指導の授業を参観し、昼食を挟み、午後はKJ法を使って、参観した授業の研究協議を行いました。

研究協議においては、自己肯定感を育む「褒める」と





ということが、授業の中に明確に位置づけられ、「言葉で」「体を使って」「視覚でわかりやすく」伝える評価を織り込んだ「褒める」が随所に見られたことや、視覚的な工夫が授業の至る所に施され、学習課題や指示事項についても視覚に訴えていることなど、今後の授業の参考になる大きな学びを実感しました。

参加した初任者からは「一番印象に残ったことは、視覚化されていて、非常にわかりやすかった点である。今日のスケジュールなども、目で見てもすぐに確認できるため、子どもたちにとっても安心できると思う。」などの感想が寄せられました。

初任者全員が「研究課題」を設定

午後二番目のスキルアッププログラムでは、初任者全員で年間の研究課題について交流を行いました。

「学び続ける教師」としての研究的力量を形成するために、「どのような課題に取り組みたいか」「なぜこの研究課題に取り組もうとしているのか」などを出し合い、代表者が発表しました。

小学校の初任者の一人は、「算数の授業を通じて、自ら考え、発表できるまでのプロセスづくりについて」、また、ある中学校の初任者は、「子どもの意欲的な学習態度を生み出す理科教材と授業づくりについて」、さらに、特別支援学校の初任者の一人は、「自閉症の子どもへの環境整理について（物理的、人的）」に設定しました。今後、大学のコーディネーター教員が中心になり研究をサポートしていきます。



◆参加した初任者の感想から

- 「先生自身が一番の教材。自分の佇まいが必要」という白井先生の言葉を聞き、私自身の言葉、行動、表情、気持ちなど、ひとつひとつを丁寧に、子どもの前だけでなく常日頃から気を付けていかないといけないと思った。また、私自身の心を成長させるためにも、さまざまな書物や講演会等を通して、心を豊かにしていく必要があると感じた。
- 振り返りチェックシートを自分で行ってみると、授業のレベルアップの必要性を痛感したと同時に、どのような観点で授業作りを考えていけばいいのかを知ることができた。今後の振り返りに活かしていきたい。
- 主指導の初任研の先生やサブの先生方が、一度も子どもを叱らなかった（怒らなかった）ことが印象に残っている。私は、自分の感情で子ども叱っているのではないかと、上手いかわからないことを子どものせいにしていないかなど自らを振り返る機会となった。教師にゆとりがないと子どもたちにも影響を与えてしまい、そこから学級の問題も起こるのではないかと感じた。肯定的な言葉かけを常に意識して子どもたちと接していこうと思った。

第4回合同カンファレンス

「楽しい道徳の授業をめざして」

7月26日(金)、和歌山大学附属図書館マルチルームにおいて、第4回合同カンファレンスを実施しました。

まず、河内長野市立加賀田中学校主幹教諭の永吉洋子先生に、「楽しい道徳の授業を目指して」と題した講義をしていただきました。高度化モデル初任者が、1学期に行った道徳の授業の中で感じたことや課題とされていること、教材の取り扱い方や授業展開で困ったことなどを、事前に永吉先生に質問シートとして提出していたので、それらを踏まえた模擬授業も行ってくださいました。

模擬授業では「いつわりのバイオリン」という教材を使い、初任者たちを生徒に見立て、「人間の弱さや醜さを克服する強さや気高さに気づき、人間として誠実な生き方を求めようとする道徳的心情を育てる」という道徳的価値について考えることを中心に授業が展開されました。発問と共感的対応を通じて初任者に気づかせ、考えさせ、様々な意見を見事に引きだしていく楽しい授業をしてくださいました。

その後、「なしの実」という教材を使い、初任者は中心発問を考えるグループワークに取り組みました。永吉先生はいろいろな場面に関わり丁寧に指導してくださいました。初任者たちは、道徳の時間の大切さと道徳の授業の意義が実感できたという表情をしていました。



「特別活動」について

— スキルアップ講座パネルディスカッション —

続いて、元和歌山市立楠見東小学校長 南方秀昭先生、県立自然博物館研修員 上中彩加先生、県立たちばな支援学校教諭 藤田佳津子先生の3名のパネラーを招き、仲間づくりや学級づくりを中心にパネルディスカッションを開催しました。

各パネラーから特別活動の領域で取り組んできたことや、取組を進める上で大切にしてきたことなどについて語っていただきました。南方先生は手作りの教材を多数持参し、それらを紹介しながら、授業の中での少しの時間でも活用して、子どもに興味を持たせることや仲間と活動することが、子どもたちがいきいきと生活できる学級づくりに繋がるとまとめてくださいました。上中先生からは中学校での具



体的な実践報告がされ、先生ご自身の新採教員としての歩みが伝わってくるような内容でした。特に、「仲間を大切に」を合い言葉に、クラスをつなぐ掲示物の作成に努力したお話が印象的でした。藤田佳津子先生からは小学部の学部集会などでの実践が報告され、「支援学校では学級や学年は少人数であり、集団活動を取り入れることで子どもたちに積極性が芽生えてきている。」と、子どもの成長に繋がっている集団活動の報告がありました。

これらの報告に対し、小学校の初任者から「男の子と女の子が仲良くなるような仲間づくりのポイントを教えて欲しい」との質問があり、南方先生から「男女の性差

はもっと幼い頃から自然と現れるものであるが、男女混合にしたチームでゲームのワークを行ってから活動に入る。」などの具体的なアドバイスがありました。

初任者全員が「絵手紙」作品を完成!

午後からは、元和歌山市立三田小学校長 稲垣紀子先生を迎え、スキルアップ講座「幸せ運ぶ魔法の絨毯」と題した絵手紙講座を行いました。



この講座は、「夏休みに子どもたちに絵手紙などを送って心をつないでいく教師になってほしい」というコンセプトで企画しました。

決して絵が得意でない初任者にも、ポイントを分かりやすく的確に教えてくださる稲垣先生の指導力に先ず驚き、みるみる授業に引き込まれていきました。気がつくと、最初は戸惑っていた初任者の先生も、それぞれ味のあるすばらしい作品を完成させることができました。

◆参加した初任者の感想から

- 道徳の授業での中心発問となるところを自分たちで考える活動をした際、子どもたちに身に付けさせたい道徳の内容によって中心発問を置く位置が変わったり、1つの資料も見方によっては全然違う教材になるんだと驚きました。「そういったところに道徳のおもしろさや楽しさがある。」という先生の言葉にとっても説得力を感じました。
- 南方先生は子どもが興味を持ち、目をキラキラ輝かせるものをたくさん紹介してくださいました。2学期から活用したいです。このようなものを作り出すアイデアは、きっと普段から視野を広げ、さまざまなことについて学び続け、考えられているからだろうと思います。私ももっと視野を広げなければと思いました。
- 「心をこめて ヘタクソに」という言葉でリラックスでき、気負うことなく取り組みました。時間をかけすぎずに、適切なルールで取り組むことで、集中力が短い子どもたちにも分かりやすく取り組める課題であると感じました。

夏季宿泊研修

1学期の実践を省察して2学期へ!

8月1日(木)2日(金)、和歌浦のシーサイドホテル観潮において、夏季宿泊研修を実施しました。

まず最初に4月からの教育実践を振り返り、自分が成長できた点や課題点をそれぞれプレゼンシートにまとめ、3つのグループに分かれて討議し、自分の実践を省察するワークを行いました。また、2日目には「2学期への心構え」についてのカンファレンスを行いました。

初任者からは、「教師の思いだけで授業を進めると、どうしても教師主体になってしまうということを感じました。どの教科でも子どもの“なぜ?”に寄り添って、子どもたちが自分で学習を進めているという実感が持てるような展開にしていく必要があると感じました。」「2学期には、1学期に実践してよかった点を継続するとともに、どんどんチャレンジもしていこうと考えている。算数の習熟度別プリントを用意することなど、一工夫して授業に挑んでいきたい。」など、教師としての成長が伺える報告が相次ぎました。



児童・生徒の人権意識を高めるために



1日(木)の後半は、大阪芸術大学教授の西林幸三郎先生をお招きして、「児童・生徒の人権意識を高めるために～子どもの心に優しさとたくましさ～」と題する講義をしていただきました。

西林先生は「大津いじめ事件」の第三者調査委員を務めた経験も交えながらお話してくださいました。そのなかでは、「相手を尊重することで人間社会は成立っている」「人権と聞くと難しく考えがちですが、大事なことは、自分がされて嫌なことは相手にもしないこと」など、分かり易く人権意識の高揚についてポイントを説明してくださいました。

また、講義の後半には、「感受性訓練について」と題して、ロールプレイング演習を行いました。体験した初任者からは、「客観的にみることで、または子どもや親の立場になることで、初めて見えてきたものがありました。私は生徒の声を心で聞いていただろうか、聞きすぎて追いつめていたのではないだろうか」と反省しました。」などの感想が寄せられました。

自分たちで考えたレクリエーション

夕食後、「子どもたちとのレクリエーションを考える」をテーマに、3つのグループに分かれて自分たちで考えてきたレクリエーションを発表し交流しました。



まず最初のチームは、懐かしいジェスチャーゲームを発表。決められた時間の中で効率的かつ体で表現する楽しさを実感できるゲームでした。次のチームは、テレビ番組のゲームをヒントに、子どもがわくわくしながら楽しめるクイズゲームを披露しました。最後のチームは簡単にできる「陣取りゲーム」を発表しました。大広間でもできる安全でかつ体を使う工夫されたゲームでした。初任者からは、「どのゲームも学級活動等で使えてチームワークを高める楽しい活動だった。」と好評でした。

先輩教師からどん欲に学ぶ

2日目は先ず、「先輩にここを聞きたい～教師としての私を高めるために～」と題した先輩教師との個別コンサルテーションを行いました。

18名の初任者それぞれが自分の課題に応じて「この先輩に是非話を聴きたい」と希望した8名の先輩教師にお越しいただき、熱心に教材づくりなどについて聞いていました。初任者は「ねらいに合わせた実験人数や実験見本の使い分け、展開のアドバイスをいただいた。アイデアが閃いた時にはメモを取り授業に活かしていることや、授業でのiPad活用等、すぐに取り組みたい話を聞いて参考になりました。」「素晴らしい機会をいただいたので、先輩の先生との繋がりをこれからも大切にしたいと思います。」と今後の抱負を語っていました。



「素敵な時間」 ～道徳の模擬授業～

2日目の2コマ目には、貝塚市立木島小学校長の川崎雅也先生が、道徳の模擬授業を行ってくださいました。

川崎先生は、教材に「一冊のノート」を用い、中心発問に時間を費やし、子どもたちの意見をどう深めるかについて具体的に授業をしてくださいました。

初任者からは、「『よりよく生きる』ための考え、道徳の授業では何を大切に展開すればよいかを学んだ。心の動きにはいくつかの傾向があることを知り、討議したいテーマに向けて誘導するテクニックを教えていただいた。心が動くことで自然と飲み込まれている自分がいた。授業に活かしたいと強く感じました。」など多くの心動かされたという感想が寄せられました。

「お母さんに捧ぐ」～保護者との連携を学ぶ～

2日目の最後に、紀の川市青少年センター長の秦野修先生より、「お母さんに捧ぐ」と題した講演をしていただきました。秦野先生は、理不尽な要求をする親のクレームの事例をもとに、その親の本音やクレームの背景に迫ることの大切さを強調し、学校、保護者、地域で繋がる「共育」が大切だと話されました。先生が担任された手の不自由な生徒の話には、「自分の子どもが将来大人になったときに、自分の赤ちゃんを抱けるようにというお母さんの願いと、愛情に感動しました。また、子どもを学校生活の中で全力でサポートし、寄り添っていかうとした先生の姿勢もとても素敵だと思いました。」などの感想が寄せられました。



第7回合同カンファレンス

「中学校の教育」から学ぶ

9月26日(木)、和歌山市立西脇中学校において、第7回合同カンファレンスの授業研究を実施しました。

まず、北垣校長先生から学校の紹介が行われました。その中で、本年4月に実施された学力・学習状況調査結果に触れ、朝食の摂取状況や就寝・起床時刻など、生徒たちの家庭生活での実態、通塾と勉強の関係などについて詳しく分析結果を説明されました。そのうえで校長先生は子どもたちに対し、確かな学力や豊かな人間性を身につけさせるための第一歩として、「あ・そ・べ」を合い言葉に学校改革に取り組んでいることを説明してくださいました。「あいさつ」、「そうじ」、「ベル着」の頭文字で、教育学者森信三先生の提唱した職場再建の3原則「時を守り」、「場を清め」、「礼を正す」を西脇中学校の生徒に分かりやすくしたものです。校長先生が地域性や時代の変化等の背景を読み取りながら学校改革に取り組んでおられるマネジメントの方向性がよく分かり、初任者にとっても学校運営で大変参考になる講義でした。



授業参観と研究協議 — 教材研究と指導方法の工夫 —



続いて、2つのグループに分かれ、西脇中学校の初任者2人の授業を参観し、その後研究協議を行いました。

数学の授業は、「方程式の利用」という単元で、教材に旅行先のレストランで支払ったレシートなどを取り上げ、方程式との関係を説明しました。教材として日常生活に近いものを取り扱うことにより、生徒の興味関心を高め学習意欲の向上に繋がる工夫がされている授業でした。研究協議でも、「身近なもの(レシート)で数学を理解させたいという気持ちが伝わる授業で、手作りの

教材は生徒も喜ぶし、やる気に繋がると感じた。」など教材の工夫に対するよい評価が相次ぎました。また、習熟度別ワークシートが準備され、生徒が自らの理解力に合わせて選択できる個への配慮もされており、さらに丁寧な机間巡視や生徒同士の学び合いなどにも関心を寄せる参加者が多くいました。

理科の授業では、「物体に加わる力と速度の関係」という単元で、いろいろな傾斜をつけた板の台の上で台車を走らせ、その傾斜角度と速度の変化の割合の関係を考察する実験を行いました。黑板にはあらかじめ今日の実験の流れとポイントが分かるように丁寧な説明が書かれており、また、生徒が実験の



予想や結果、考察がスムーズにできるように、工夫を凝らしたワークシートも準備されていました。生徒全員が積極的に実験に取り組み、時間内に実験を終えることができました。研究協議では、「1クラス40人近くいる生徒への実験授業での『グループ構成』『指示の通し方・注目すること』『振り返りの方法』など大変工夫の凝らされた授業だった。」「グループ間の進み具合も考慮しながら、授業を成立させるための工夫（ワークシート・板書・実物投影機の導入）がなされていた。」「ワークシートは実験の手順や目標確認、振り返りまでが見てわかるシートで大変参考になった。」など、指導方法の工夫に高い評価の意見が多く出されました。講義でした。

研究課題について深める!

～大学教員による中間的なコンサルテーション～

午後からは、「私の研究課題と研究計画」というテーマで、初任者が1年間研究しようとしている課題について、「なぜこの研究課題に取り組もうとしているのか」「1学期の取組と新たな課題」「当面の取組」などを3つのグループに分かれてカンファレンスを行い、大学教員がコンサルテーションを行いました。

その中では、「研究課題と研究結果の整合性を重視すること、研究課題の一言一句と『当面の目標』『当面の取組』に一貫性を持たせること」など研究方法の根幹に関わる助言がなされました。また、「教師としての授業目標と、授業を通じて児童生徒が獲得する認識との差異をどう捉えるか。葛藤を引き起こす道徳教材はどうあるべきか。」などについて考えることができ、初任者が教科教育の専門研究者に今後相談していく契機になりました。



◆初任者の感想から

- 子どもたちの評価カードの感想には「今日はしっかり勉強した！」など前向きな感想が多く、大勢の参加者の中でいつもより緊張感のある授業を受け、子どもたち自身も何か得るものがあったのではないかと感じます。次の日の授業の最初に、私は子どもたちに自分の感動を伝え、たくさん褒めてあげました。すると、その後の授業から少しずつですが、子どもたちの授業に取り組む姿勢が変わってきた気がします。子どもたちの意識をもっと向上させることができるかどうかは、これからの私次第ですが、研究授業で子どもたちの確実な変化を目にすることができ、それだけでもこれからがんばろうという気持ちになれました。
- 「方程式の利用」の1時間目で、小学校流の解き方と中学校流の解き方の違いなどができました。中学校では、小学校でのことを生かしながらさらに新しいことを学んでいくのだということから、基本を教える小学校教師としての自分の役割責任の大きさに改めて気づかされました。
- 研究課題については、まだまだ考えなければいけない点がありましたが、大学の先生方と協議し、アドバイスをいただく中で方向性が見えてきました。普段から子どもと関わる中で子どもの様子をしっかりと見て分析し、子どもが意欲的・主体的に動けるよになるにはどのようにすればいいのかを深く考えて、子どもにあった課題を設定し、関わっていきたいと思います。

第8回合同カンファレンス

「小学校の教育」から学ぶ

10月24日(木)、和歌山市立藤戸台小学校において、小学校の授業研究を行いました。

まず、三木校長先生から、「開校3年目の新しい学校で、全国では少子化が進んでいるが、本校は毎年約100名ずつ子どもが増えている。」という話がありました。また、「隣接する和歌山大学の連携協力校となっていること」「『教師



の授業力をあげる』ことが、『子どもの学力をあげる』ことにつながるというコンセプトのもと、『学力の向上』、『和歌山大学との連携』、『全国への情報発信』をキーワードとして学校力向上に取り組んでいる。」と話されました。

続いて、現職教育主任の伊勢真朝美先生から「マイプラン」(一人ひとりの育てたい子ども像と育成のための具体的計画)の取組について説明がありました。藤戸台小学校の研究テーマは、『自己表現力



を高め、学び合いのできる個と集団の育成 ~山場のある授業づくり~』であることが紹介され、「子どもが意見を出し合って終わりではなく、山場をつくるための教師の出場を大切にしている。」とそのねらいを解説してくださいました。また、ひとりの教師が年間2回の研究授業を行い、授業実践と成果の検証に取り組んでいることも話してくださいました。

授業参観と研究協議

－ 子どもの関心意欲を高める指導方法の工夫 －



続いて、2つのグループに分かれ、藤戸台小学校の初任者2人の授業を参観し、その後研究協議を行いました。

2年生の国語の授業では、主教材の「お手紙」をより深く読み取るために、副教材「なくしたボタン」を用いる「重ね読み」をおこないました。最初の音読の部分ではiPadを用いるなど、児童の興味関心を高め学習意欲の向上に繋がる工夫がなされている授業でした。

研究協議では、「書いて考えをもってから授業に臨んでいる。ハンドサインを使っての発表や、聞くときのルー

ルづくりができています。授業づくりの工夫がたくさん見られる。」など評価が相次ぎました。課題として、『山場のある授業づくり』にするために先生がどこで切り返しをするのか。子どもたちの考えをより広げたり深めたりするには、教師の適切な言葉かけが重要だ。」との意見が出されました。和歌山大学の菊川教授からは、教材の内容をより深く理解するための音読による読み込みの重要性や、挿絵を効果的に使うことなどについて助言がなされました。

3年の社会の授業では、「ぼくらのまちのスーパーマーケット、マックスバリュー」という単元で、調べ学習した内容を発表し合い、考えを深め合いました。授業はコの字型の机の形態で行うことで、子どもたちは友達のほうを見て発表し合い、「つけ足して」「違って」「質問」など言葉のキャッチボールを楽しんでいました。子どものネームプレートを3色つくり、子どもが何回発言したか、どのような考えを発言したかを視覚的にとらえることができるような工夫がなされており、子どもたちの手は1時間絶えず挙がり続け、日頃からの積み上げがうかがえる授業でした。研究協議では、「児童から出てきた意見を整理しながら板書し、それぞれの関連を視覚的に表していて、是非授業にも取り入れたいと思った。」「発問を絞ることで子ども同士の学びあいや深めあいを大切にしていた。」などの意見が出されました。

課題として、「子どもたちの発言を重視するあまり、深めていくタイミングをのがしてしまったと思う。切り返していくポイントを決めておくべきだったと考える。」などの指摘がありました。和歌山大学の川本教授からは、「事前に行っていたオークワ等の調査と比較すれば、学びはもっと深められた。そのようなことを気づかせる発問を子どもに適切なタイミングでおこなう工夫をしてほしい。」などの助言がなされました。



学級経営について初任者2名が発表!

午後からは、「私の学級経営について」というテーマで、初任者2人がそれぞれ担任しているクラスの現状と課題、学級経営のねらいについて発表し、協議しました。

小学校の初任者からは、「困り感を抱えている児童の漢字の学習では、筆順重視ではなく意味や成り立ちから覚えられるドリルを用意し、それを他の児童も共有できるようにしている。」「ある子どもにとってわかりやすい工夫や支援は、全ての児童にとってもわかりやすくなる。」など工夫を凝らした実践に取り組んでいる報告がなされました。また、中学校の初任者からは、「教科担任制の中学校では、自分の担任するクラスの子ともと接する時間が限られているが、そんな中でも学級活動や学級通信などを通して子どもたちとのコミュニケーションを大切にしている。」「木の枝を教室に掲示し、良いことや嬉しいことがあれば、葉（の形に書いた紙）に書いて貼っていく、『よるこびの木』をクラスづくりのポイントにしている」などの実践が報告されました。参加者からは、「2人の先生のクラスの子どもたちはしあわせだろうなと思いました。でも、負けてられないとも思ったし、子どもたちにとって、私もこの

先生でよかったなと少しでも思ってもらえるようになりたいなと感じました。」「『障害』を問題とするのではなく、対象児の抱える『困り感』を共有することが大切だと感じました。」「学級満足度が高いクラスは、学級経営がより円滑になるといったお話を聞いて、クラスの児童生徒の結びつきがあり、何よりも児童生徒自身が楽しいと思える『クラスづくり』が特色ある学級経営につながると感じました。」などの感想が大学に寄せられました。



iPadのすごさに感激!

午後の第二番目のプログラムは、和歌山大学 豊田充崇 准教授による講義と演習「ICT教材を用いた授業について」を行いました。豊田先生はiPadを用いて、様々なアプリケーションを紹介しながら、「全国学力学習状況調査でも、プロジェクターなどのICT機器を授業に活用している集団ほど正答率が高い」とその効果を強調されました。初任者からは、「先生おっしゃられたとおり、ICT機器を使うことが目的ではなく、子どもたちにとって有用性があるかどうか、本当に必要なかどうかを考えて使わなければいけないと思いました。」「早速、講義の後で、都道府県パズルや漢字学習のアプリケーションをダウンロードし、学校では休み時間等に子どもたちに自由に使わせてみた。子どもたちも興味津々で取り組んでいる。」等の感想が大学に寄せられました。



◆参加者の感想から

- 初めて授業を見てもらうという経験をしましたが、子どもたちが緊張しながらも本当によくがんばってくれたなと感じました。この授業研をさせてもらえて、社会の単元ってこういう風に組み立てていくんだなと少しでも知れたこと、この単元を通して子どもの成長を感じることができたことは自分にとって財産になったな、授業させてもらえてよかったなと自信をもって言えます。
- 子どもたちが自分で足を運んで学んできたこと、インタビューしてきたことについてまとめ、発表している姿に「学ぶというのはこういうことだ」と感じました。小学校でこのような力をつけて中学校へ来ているということは、中学校の生徒にはもっと自ら学び、討論するという授業をしなくてはいけないなと思いました。

紀伊コスモス支援学校 校内カンファレンス紹介



紀伊コスモス支援学校での校内カンファレンスの1コマを紹介します。25日は、午前中大学教員による初任者の授業参観、午後からは個別に同校の授業チェックリストも活用しながら、授業の振り返り（過日に参観した授業を含む）を行いました。その後、初任者全員（6人）が参加した校内合同カンファがあり、今回は「肢体に障害のある子どもたちの指導」をテーマとし、映像を交え同校独自のマニュアルを活用して討議を行いました。

た。その中で、知的に障害のある子どもの指導にも相通じるものと理解できました。

校内とは言え、初任者は、日頃から他学部の授業を見る機会が少なく、校内カンファが新たな気づきや学びの場となっています。続いて「車椅子の体験」では、実際に試乗することで「車椅子の子どもが安心して乗ることができる車椅子の操作」などを学びました。同校では、日頃の授業参観・振り返りとは別に、こうしたテーマ（「指導案の書き方」「教育課程」「アセスメント」「進路指導」など）を設定して、月2回程度行ってきています。

以上、ほんの一部を紹介しましたが、同校では、学校挙げて初任者高度化モデル校内体制を構築し、校内研究テーマ（子どもが動く授業、将来につなげる授業）とリンクしながら、カンファに取り組んでいるところが大きな特長となっています。

